

コールリッジ

イーオラスのハーブ

——訳と解説——

岡 本 昌 夫

思いに耽けるわたしのセアラよ、あなたの和らかい頬をわたしの腕によせて

(清浄と愛のシンボルなる)

白い花咲くジャスミン、葉の大きいてんにんくわの生い茂る

わが家のかたえに坐つて
じつと雲を眺めていると

とても心のしづまる思いだ。

その雲は今しがた光を受けて輝いていたが
今は次第に光うすれて、ま向いに輝く

宵の明星が清^{すが}すがしく明るい

(知慧とはこんなものでなければならぬ)。

向うの豆畑から流れて来る香の

何と素晴らしいことだろう。そしてあたりの自然の
なんと静けさ。

遠い海原の静かなつぶやきは

反ってわれらにしじまを思わせる。

聞きたまえ、あの蔓草のからむ窓辺に

横たえられたあのいとも簡素なルートを。

それは半ば恋人に身をまかせた内気な乙女のように
気まぐれなそよ風になぶられて

いとも甘美なとがめをふりそそぐのだ、

又もさそわれていたづらをくりかえさないではいられぬよ
うに。

今やその絃は一きわ力強くかき鳴らされ、

潮々と鳴る長いしらべはこころよい波に和して

高く又低くひびきわたり

夕べお伽の国から微風に乘って来る

ほのかな小妖精がかき鳴らす音のように

かすかに流れる魔法の音をひびかす。

お伽の国では「メロディ」の妖精が蜜のしたたる花の中を
楽園の小鳥のように足も見せず狂気にかけ廻ぐり

なれぬ翼に乗って舞い、

休みもせず止まりもしない。

おお、われらの内と外なる一つの生命よ、

それは総ての行動を集約してその魂となり、

音のうちなる光、光のうちなる音のような力、

総ての思想のうちなるリズム、各所に遍在する歓喜となる

のだ――

思うに、かくも満ちあふれた世界にいて

万物を愛しないわけには行くまい。

微風がさえずるように鳴り、

音のない静かな空気が、そのまま音楽となって

その楽器にまどろむ世界にいて。

ああ恋人よ、私は今向うの丘の中腹にでもいるかのよう

ひる日中自分の手足をのぼし

目を半眼に開いて、陽の光がダイヤのように

海原におどるのを見

静かに静寂について思いふける。

すると、呼びおこしもせず又とっておきもしなかったあま
たの思想や

むなしく飛び交うあまたの空想が

ものうく受身がちな私の頭脳を横ぎる。

この受身のルートにはたはたと吹く

気まぐれな風のように

あてずっぽうに、又雑多な色合をもって。

生きとし生けるものの総ては

構造は異なるけれども、すべてうちふるえて思想となる

有機的ハープでなくて何であろう。

各人の魂であると共に万物の神である

一種の知慧の微風が、やわらかく又広く

その上を吹き渡って

妙音を作り出すのと同じだ。

だがあなたの一層真剣になった目は、

やさしい非難の矢を放ち、

こんな曖昧な邪悪な思想はまっぴらだといって退け、
神と共につましく歩けと私につげる。

キリストの徒なるやさしい娘よ。

あなたはこの再生を得ぬ心の作り出したもの、
空しい哲学の永久にあわ立つ泉に
結んでは消え又輝やく泡沫について

語り且つ非難するが、

その言は正しく、その非難は神聖だ。

なぜなら、理解することの出来ぬ神について
罪なしに語ることは出来ないからだ。

畏敬を以て神をあがめ

心のうち深く感じる信仰を以て

神をあがめるのでなければ。

だが大いなる神は、慈悲深い救いを以て、
この罪深く又いともみじめな人間なる私、

闇にふみ迷う私の心を癒やし、

平和とこの家とあなたという真に尊い乙女を

私に与えなされたのだ。

解 説

この詩は誰の目にもコールリッジの結婚前後の頃の甘い冥想を綴ったものと写るであろう。誠にその通りであって、一七九六年のコールリッジ詩集によれば「一七九五年八月二十日ソマーセットのクリーヴダンにて綴る」と記されているのである。コールリッジは一七九五年十月四日に結婚してクリーヴダンに落ちついたのである。

コールリッジの詩は一般に最高度に想像力豊かな詩であると考えられる。想像力が豊かであるということは、詩人の思想と感情が渾然と一体となって優れた芸術作品に結晶しているということであるが、コールリッジのこの詩は、彼の想像力の豊かさを証する一つの証拠と考えられるのである。

コールリッジは一七九六年十二月友人ジョン・セルウォールに与えた手紙の中で、「私は強く感じ、強く考えるが、考えることなく感じたり、感じることなく考えたりすることは減多にない」といい、又「私の哲学的意見は私の感情と結合し、又そこから引き出されたものであり、これこそは私の作品のスタイルを特徴づけるものであると考える」と述べているのであるが、このことは殊にこの「イーオラスのハープ」を読む時に心にとめておかねばならぬことである。

詩人は先づ恋人を腕によせてわが家のそばに坐り、じつと雲を見て思いにふけるさまを描いているが、その雲を照らす光の変化や、やがてま正面に輝く宵の明星のあかるさ、豆畑から流れて来るかぐわしい香、そして遠くに聞えるかすかな海の波音——総て美しい叔景であり抒情である。そのうち総ての音は窓辺に横えられたルート音と化し、その音は濁々と高く又ひろくひびき渡る。それはやがて小妖精がかき鳴らす音のように魔法の音と化し、蜜のしたたる花の間をかけめぐる。

ここでコールリッジの感情は思想と化して、万物を一つの生命に集約し、総ての思想にリズムを与え、万物に歓喜と愛を与えるのである。陽の光と海の音とが一つになってコールリッジの思想のうちに生きるのである。「生きとし生けるものの総ては、構造は異なるけれども、総てうちふるえて思想となる」ハーブの如きもののなのである。ここには或る普遍的な生命の思想が考えられて居り、総てのものから同じ音楽が聞かれ、総てのものは同一生命を内に含むのである。然るにかような考は必ずしもキリスト教思想と一致するものではなく、プラトニンないしプロティノスの思想に基づくものであるから、その思想とキリスト教思想との間の矛盾が考えられるのである。それで彼の恋人セアラは「やさしい非難の矢を放ち、こ

んな曖昧な邪惡な思想はまっぴらだといって退け、神と共につつましく歩けと私に告げる」のである。

万物をふるわすものは一種の智慧の微風であつて、「それは同時に各人の魂であると共に万物の神である」との思想は、ボウエルも云っているように、プロティノスの「エネアデス」の思想であるといつてよからう。（「The image is perhaps derived from Plotinus, *Ennead* IV, iv, 41. Powell: *Romantic Theory of Poetry*, 1926, p. 86）それ故コールリッジはプロティノスの思想と純粹なキリスト教思想の矛盾に心を悩ましていて、「畏敬を以て神をあがめ、心のうち深く感じる信仰を以て神をあがめるのでなければ」神を語ることとは冒瀆であり、罪惡であると考えるのである。然るに慈悲深き神は、いとも罪惡き、又迷いに沈潜しているコールリッジの心を癒して、平和を与え、家を与え、恋人セアラを与え給うたのである。コールリッジの全能なる神への信頼と感謝はここに遺憾なく示されているといつてよいであらう。

この詩はコールリッジ二十三歳の時のものであつて、最も若いころの極めて純粹な感情の発露であると共に、最も明るい悩みのない詩であるが、僅かに思想的な迷いに低迷している彼の心を打ち開けているものといつてよからう。ほぼ同時に書かれた宗教的冥想詩、例えば「*Religious Musings*」や「*The Destiny of Nations*」に比して、はるかにすっきりとした清すがしさを持ち、明るい美しさを持つ詩であるとい

うことが出来る。数年後に書かれたコールリッジの傑作に比べれば、幼稚な感をまぬがれないが、然し、彼の数少ないま

書 評

Seymour L. Gross ed. *A "Scarlet Letter" Handbook*. San Francisco: Wadsworth Publishing Co., c1960.

これはホーソンの『緋文字』に関する非常に恐ろしい書物である。「恐ろしい」という意味の説明はあとからしよう。

この書物の本体は、第二部の『緋文字』論のアンソロジーである。アンソロジーといっても、一八五〇年以來今日まで発表された沢山の論文を全部掲げているのではない。編者はまずこの小説の考察の焦点を四つ設定した。Theme, Characters, Symbolism, Structureである。そしてこの各焦点について、すぐれた洞察・理解・批判を展開したり、問題を提起している様々な論文の、要となつてゐる数節をとり出して配列している。Charactersの項目は更に人物描写と人物論の二つに分れてゐるので、正確には五つの項目に分れてゐることになつてゐる。この焦点の設定は実に歯切れがよい。ただ作品全体の芸術的価値或は『緋文字』の美学といった問題が分散したうらみはあるが、例えば、ヘンリー・ジェイムズが指摘したシンボリズムへの過度の依存といった批判が Symbolism の項で、対照的な見解と並列されているため、かえつて芸術的価値の問題でも具体的に扱われ、問題点が明確にされてゐるといえる。

作品論に限らないが、研究論文や批評論の一部を抜くことは

まった詩としてコールリッジの傑作の一つに教えてもよからう。

たいへんな危険をはらんでゐる。部分の論旨は全体の論旨との関係に於て理解され批判されねばならないからだ。ところが、この編者の抜き方は、二・三の例に当つた限りでは全く危げがない。むしろ個々の論文の非本質的な衣裳や仮面がはがされ、書き手のポーズがこわされて、当の論文の実質がむき出しになつて並んでゐる。ここに並んだ三十六編の論文を俯瞰すれば『緋文字』の Scholarship の現状がづさにわかる。どの問題についてどんな理解と批判がなされ、どのような対立意見があるかが一眼で理解できる。全く、便利の一言につきる書物である。

だが、この便利だということには二つの恐ろしい意味がある。一つは、このように『緋文字』の Scholarship が示されてみると、我々が考えたり、観察してきたことは、既に何等かの形で、誰かが、どこかで、より深く論じたことで、我々はそれを知らずに、或は知つていても知らないこととして勝手な熱をあがっていたのだと、我々の無智を教えられたり、化の皮をはがされたりして慄然とすることである。我々の考へて来たことは自分自身の為にはなつたかもしれないが、『緋文字』の Scholarship に貢献するほどのものではないという自己認識と、これから『緋文字』を論じるには、批評家としても研究者としても、この書物を通らねば物を言う資格がないという学問の厳しさ——この書物の便利さはこういふことを語るのである。「恐ろしい」という意味の一つはこの点にある。

編者が一言ふれてゐるように、この書物は『緋文字』そのものと連関して用いられるべき性質のもの（一一五頁に続く）